

論 文

「鏡」の文化的含意

——『古事記』を中心として——

程 海 蕓

広島大学大学院文学研究科博士課程後期

The cultural implication of “mirror” : Focusing on “Kojiki”

CHENG Haiyun

Abstract: The word “mirror” appeared 15 times in the book “Kojiki” and each time has a sacred meaning. Nevertheless, there seems to be no previous research to analyze them in detail. Therefore, in this article, we will divide the 15 examples into three, and analyze their cultural meanings.

Keywords: Iwainokagami, Yatanokagami, The worship of the sun, The worship of the snake, The integration of the worship

はじめに

『古事記』には「鏡」が15例出現しており、しかもみな神聖的な鏡である。とはいえ、それらを詳しく分析する先行研究はまだないようだ。したがって本論文では、『古事記』の15例の「鏡」を三種類に分け、その文化的含意について具代的に分析してみたい。

一、齋鏡

『古事記』では、天照大神は孫の邇邇芸命を高天原から降して、この葦原中つ国を治めさせようとした際に、勾玉と鏡と草薙剣を授けた。鏡を授けた場面は次のとおりである。

これの鏡は、もはら我が御魂として、吾が前を拝くがごと、齋きまつれ。次に思金の神は、前の事を取り持ちて、政まをしたまへ」とのりたまひき。

(武田祐吉訳注、1979: 64)

『日本書紀』では、相手が邇邇芸命から天忍穗耳尊に変わっているが、天照大神は似ていることを言っている。

是時、天照大神、手持寶鏡、授天忍穗耳尊而視之曰「吾兒、視此寶鏡、當猶視吾。可與同床共殿、以爲齋鏡。」（望月二郎、1897：54）

『日本書紀』では、鏡は「齋鏡」と呼ばれ、「いわひのかがみ」と訓読されている。『古語拾遺』にも「大倭本紀一書曰、天皇之始天降来之時共護齋鏡三面、子鈴一合也、一鏡者天照大神之御靈、名天照大神也。一鏡者天照大神之前御靈、名国縣大神紀伊国名草宮崇敬鮮祭神也、一鏡及子鈴者、天皇御食津神朝夕御食夜護日護齋奉大神今卷向穴師社宮所坐鮮祭大神也」¹という記載があり、「鏡」はまた「齋鏡」と呼ばれているのである。

『説文解字』によれば、「齋：戒、潔也。从示、齊省聲。𦵏、籀文齋从𦵏省。」²といい、祭祀の意味である。『広辞苑』では「①不浄をきよめ、いみ慎んで神をまつこと。神代紀下「～の大人と号す」②神をまつる所。また、その人。雄略紀（前田本訓）「伊勢大神の祠に侍り」③<祝>めでたい事を喜ぶこと。祝賀。また、祝賀の行事、言葉、品物など。」³と解釈されている。「いわひ」の訓読漢字としては、「齋」のほかにもまた「祝」とも書かれ、『説文解字』によると、「祝」は「祭主贊詞者。从示从人口。一曰从兌省。『易』曰：“兌爲口爲巫。”という。屈原の『楚辞・招魂』にも「魂兮归来、入修門些。工祝招君、背行先些。」という文言があり、「工祝」が用いられている。「祝」は祭祀の主祭者を意味し、齋戒沐浴の意味も含まれているということが分かるのである。

『古事記』允恭天皇の段にも、似ている例が見られる。

隱国の 泊瀬の河の 上つ瀬に 齋杙を打ち、下つ瀬に ま杙を打ち
齋杙には 鏡を掛け ま杙には ま玉を掛け ま玉如す 吾が思ふ妹 鏡
なす 吾が思ふ妻 ありと いはばこそに 家にも行かめ 国をも偲は
め。（武田祐吉訳注、1979：169）

木梨軽太子は恋する同母妹軽太郎女衣通王が玉のような妹、鏡のような妻だとほめたたえており、軽太郎女への熱い愛情を伝えるために鏡と玉を齋杙や真杙に掛けて祈っているわけであるが、この点から、玉や鏡は美しく清らかな女性の表象として用いられているということが明らかである。

該当箇所注の注釈によると、「以上序で、次の玉と鏡の二つの枕詞を引き出す。

川中に柱を立てて玉や鏡を懸けるのは、これによって神を招いて穢を払うのである」(武田祐吉訳注、1979:169)という。『日本古典体系3・古代歌謡集』では、また次のように解釈されている。

○斎杣 — 斎み清めた杣。川瀬で行われた祭儀(六月祓、夏神楽など)の景物を提示している。○鏡を掛け — その杣に鏡や玉を掛ける。鏡や玉は祭具で、天の岩戸の神話にも天の香具山の賢木に「上つ枝に玉を掛け、中つ枝に鏡を掛け、下つ枝に青和幣、白和幣を掛け」(古語拾遺)とある。⁴

以上の引用を踏まえて考えると、「斎杣」にかけた「鏡」は祭儀用の鏡なのである。鏡と祭祀の習俗としては、また「鏡餅」があげられる。鏡餅を祀ることが天武天皇4年(684年)からの習俗であり、平安時代に書かれた『源氏物語』には、宮中の正月行事として鏡餅を飾ることが描かれている。

鏡餅は銅鏡の形と似ていることによって「鏡餅」と名付けられたという説がある。昔の鏡は青銅製の丸形で、祭祀に用いられていたもので、両者は確かに共通しているのである。『日本大百科全書4』の解説では、「正月用のお供え餅。昔の金属鏡から連想した、丸く平たい形の餅で、祭礼などの供物にも用いられるが、正月に歳(年)神に供える物をいうのが一般的である。年の境にあたり、家族各人の靈魂をかたどった餅を捧げ、靈の更新を図るのが古意で、身祝いの餅はその伝統をとどめている。三方にのせ、重ね餅にして飾りたてるのは、蓬菜(お手掛け、食積ともいう)の形と合体したためである。普通二個を重ねるが、三個の所もある。それにダイダイ、イセエビ、干し柿、昆布、ウラジロなどをそなえる。」⁵と書かれている。人の靈魂をかたどる餅を祭るのがその本当的な意味なのである。

吉野裕子氏は「鏡餅」が蛇信仰の表れであると指摘している。萩原秀三郎氏はまた「鏡餅」を日月の象徴だとみなしている。鏡餅は米で作られたもので、丸い餅が正午の太陽に似ている。日本には「新嘗祭」があり、毎年11月23日に宮中の神嘉殿で執り行われ、その年の初穂を天照大神はじめ、天神地祇にお供え、五穀豊穡を感謝してから、天皇自身も初穂を食するのであるが、米あるいは稲は太陽神と深くかかわっているので、米で作られた鏡餅を供えることは、太陽神を祭り上げることを意味するのではないかと考えられる。

正月が終わって下げた鏡餅は、「鏡開き」をして食べる。鏡は円満の意、開くことは末広がりの意味する。日本の鏡餅と似ているものは、中国の稲作漁

撈民である苗族村で見たことがあり、苗族中部方言では「jed jenf」（祭祀用の餅）という。日本と同じように米で作られ、新年の時に祭り上げられる。そして下げた餅は揚げ餅、あるいはお粥餅として食べる。

中国山東省の萊蕪地方にも旧正月のときに似ているような食べ物が見られる。現地の人はそれを「聖虫」という。筆者は『山東の「聖虫」と日本の「鏡餅』』と題する論文で指摘しているが、「聖虫」はとぐろを巻く蛇の姿をしており、旧正月十五日に、家々でそれを作って供える。「聖虫」は一般的に直径10センチメートルなので、食べ方もみんなで分けて食べ、日本の「鏡開き」と似ているのである。

もちろん現在、「聖虫」は小麦粉で作られているが、しかし4600-4200年前に気温は今より2度高かったので、萊蕪一帯では蚩尤をリーダーとした苗族の「九黎」稲作連邦によって大規模な稲作農耕が行なわれ、当時の「聖虫」はモチゴメで作られていたにちがいない。そして4000年前、黄帝が率いた畑作牧畜型の華夏連盟と蚩尤が率いた稲作漁撈型の「九黎」連邦が衝突した、蚩尤の民は「尤人」として朝鮮半島や長江中下流域に逃げていった。3000年ほど前に、一部の「尤人」は戦乱で日本列島に逃亡し、稲作農耕もそれにともなって伝わってきた。この歴史的経緯を踏まえて考えれば、「聖虫」ももともと稲作農耕の産物であり、日本の「鏡餅」も中国苗族の餅文化に由来したものだといえよう。

二、八咫鏡

八咫鏡は天照大神の神体である。大槻文彦氏は『新編大言海』で、鏡は「赫見ノ義、鏡ノ初ハ、日神ノ御光ヲ摸シテ造レリト傳フ」⁶と指摘しており、戸部民夫氏は『神秘の道具』で「古代の人々は、鏡に映った像をその人物の分身と考え、また丸い形の中に太陽を映す。鏡が太陽神を象徴として感じとった。」⁷と述べている。『古語拾遺』ではまた、「於是、從思兼神議、令石凝姥神、鑄日像之鏡。初度所鑄、少不合意。（是紀伊國日前神也）次度所鑄、其狀綺麗。（是伊勢大神也）」（飯田瑞穂校注、1986:10）と解釈されている。鏡は伊勢大神、すなわち天照大神であり、現在でも伊勢神宮に祭り上げられているのである。

『日本書紀』にも、「一書曰、伊弉諾尊曰「吾欲生御宇之珍子。」乃以左手持白銅鏡則有化出之神、是謂大日靈尊。右手持白銅鏡則有化出之神、是謂月弓

尊。」(坂本太郎、1994:429)とあり、伊弉諾尊は白銅鏡を持って大日靈尊あるいは天照大神を生み出したということであるが、白銅鏡はつまり八咫鏡、天照大神の神体なのである。

『古事記』によれば、八咫鏡は石凝姥命によって作られたものであり、「石凝姥命(いしこりどめのみこと)」は「石の鑄型を用いて鏡を鑄造する老女」という。「ドメ」は「トメ」から変わってきたので、有力者の意味も含まれており、八咫鏡は権力とつながっているのである。

『古事記』には天照大神の弟神である速須佐の男の命が彼女を訪ねた記載がある。速須佐の男の命は、高天原にある水田の畔あぜと溝を壊し、春の種まきや秋の収穫を妨げ、また神聖な御殿を汚し、さらに布を織る機屋に皮をはいだ馬をなげこむなど、乱暴の限りを尽した。怖くてたまらない天照大神は天の石屋戸に身を隠した。その結果、高天の原、地上界(葦原の中つ国)は闇に包まれ、暗くなった。すると、神々は天照大神を引き出すために色々と考え、「真賢木」を立て、「八尺の鏡」を掛けた。

天の児屋の命布刀玉の命を召びて、天の香山の真男鹿の肩を内抜きに抜きにて、天の香山の天の波々迎を取りて、占合まかなはしめて、天の香山の五百津の真賢木を根掘じにこじて、上枝に八尺の勾瓏の五百津の御統の玉を取り箸け、中つ枝に八尺の鏡を取り繫け、下枝に白和幣青和幣を取り垂でて。(武田祐吉訳注、1979:37)

こうして天照大神を天の石屋戸から引き出したわけだが、『日本書紀』では天照大神を引き出すためのその鏡が「八咫鏡」と命名されている。

亦、以手力雄神、立幣戸之側、而中臣連遠祖天兒屋命・忌部遠祖太玉命、掘天香山之五百箇眞坂樹、而上枝懸八坂瓊之五百箇御統、中枝懸八咫鏡一云、眞經津鏡、下枝懸青和幣和幣、此云尼枳底・白和幣、相與致其祈禱焉。(望月二郎、1897:27)

「八咫鏡」の「八」は「はち」とは読まず、「や」と読まれている。「八」に関して、『日本書紀』には八神、八握鬚髯、八咫鳥、八坂入彦皇子、八釣白彦皇子など「八」(や)が計445回出現している。そして「八」(や)は数が多いことを表すだけでなく、神聖的な意味も内包されている。

「咫」について、筆者は『論太陽信仰與蛇信仰の一体性——基於對日本鏡與中国苗族鏡的考察』の中で指摘したが、「一咫」は人差し指と中指を広げ、そ

の間の距離をさしているのである。『日本書紀』の八咫鏡の一書に、真経津鏡があり、マは美称の接頭語、フツは赤・赫・火などの意味ととることもできるような例である。こうしてみると、「八咫鏡」は八つの「一咫」がある赤い鏡を意味するわけであるが、漢代の銅鏡には確かにこのようなものがある。山東博物館には、このような「八咫鏡」(図1)が一面展示され、しかもその鏡背が赤く染められている。朝日の象徴であると考えられる。



図1 山東省博物館で撮影した銅華鏡、李国棟撮影

日本では、このような鏡を内行花紋鏡というが、筆者の考えでは、内行花紋は実に「八角太陽紋」である。伊都国の平原遺跡1号墓から直径46.5センチメートルの鏡をはじめ、鏡40面が出土したが、図2のように鈕座の周りには八つの円点紋あるいは円い草葉紋があり、外に八つの連弧があるので、太陽の象徴だと考えられる。『抱朴子』によれば「明鏡の九寸以上なるを用いて自ら照らし、思存する所有ること七日七夕なれば、則ち神仙を見るべし」(渡邊静夫編、1994:854)とある。その神仙はやはり太陽神であろうと考える。

そのほかに、弥生時代中期の「奴国」の中心地とされる須玖岡本遺跡からは、奴国の王墓および30面以上の前漢鏡が出土した。その中には草葉紋内行花文鏡があり、鈕座の周りに十二角の太陽紋、外縁に二十角の太陽紋のような内行花紋が鑄出されている。『論太陽信仰與蛇信仰の一体性——基於對日本鏡與中国苗族鏡的考察』が指摘しているが、中国湖南省湯家崗遺跡で出土した祭祀用の白い陶盤底部から×紋、十字紋、八角紋、十二角紋などの紋様が発見された。紋様と稲作の関係から見れば、全ての紋様は稲作文化と関わる太陽紋であることがわかる。太陽紋の基本数は四、その後、太陽紋の数量は

四の倍数で増え、八角太陽紋、十二角太陽紋、十六角太陽紋、二十角太陽紋と出現してきたが、奴国の二十角太陽紋の内行花文鏡から見ると、弥生中期から太陽信仰はすでに鏡とつながっていたことがわかる。一世紀の日本列島では恰度稲作農耕の普及期であり、太陽信仰と稲作農耕は密接にかかわっていた。



図2 11号鏡 内行花文八葉鏡 李国棟撮影

銅鏡に関する日中両国の交流については、邪馬台国の倭国の女王である卑弥呼は魏の明帝に鏡を請求したことがあり、魏国から「銅鏡百枚」をたまわった。中国三国時代の歴史を記録した『三国志』魏志倭人伝には

今以絳地交竜錦五匹・絳地縹粟罽十張・蒨絳五十匹・紺青五十匹、答汝所献貢直。又特賜汝紺地句文錦三匹・細班華罽五張・白絹五十匹・金八両、五尺刀二口・銅鏡百枚・真珠、鉛丹各五十斤、皆装封付難升米・牛利。還到録受、悉可以示汝国中人使知国家哀汝，故鄭重賜汝好物也。⁸

とある。また同章梯俊正治元年の記載には「正始元年、太守弓遵遣建中校尉梯儁等、奉詔書・印綬詣倭国、拜仮倭国、并齎詔賜金・帛・罽・刀・鏡・采物。倭王因使上表答謝詔恩。」(鳥越憲三郎、2016:102)とあり、鏡が再度登場している。

一般的には、卑弥呼はヒミコの当て字で、「日巫女」の意であり、太陽神の世話をする巫女なので、当然のことながら銅鏡が大好きなのである。魏国からたまわった「銅鏡百枚」のなかには、内行花紋鏡がたくさん含まれているにちがいない。

一方、卑弥呼はまた三角縁神獸鏡を非常に重視している。三角縁神獸鏡縁部の断面形状が三角形状となっているので、こう呼ばれているわけだが、藤田憲司の『邪馬台国とヤマト王権』によると、畿内では、古墳時代の「三角縁神獸鏡総数 390 のうち 327 面は複数副葬の墓から出土している」という。藤田憲司の考えでは、三角縁神獸鏡の分布は畿内地域が突出しており、全出土量の 47% を占め、畿内の勢力と深く関わっているのである。古墳時代には鏡、特に三角縁神獸鏡は大量副葬に用いられていたことから見ると、権力とも祭祀とも深くかかわっていることがわかる。

三角縁神獸鏡の鏡背の三角紋については、日本の環境考古学者安田喜憲氏は日本の古墳時代前期の古墳から出土した三角縁神獸鏡の三角紋は蛇の頭だと指摘している。吉野裕子氏も三角縁神獸鏡の三角紋は蛇だと言っている。蛇の頭は三角で、蛇体の花紋も三角のようである。稲作文化の背景から考えれば、安田喜憲氏と吉野裕子氏の解釈は正しい。

日本では鏡は蛇の目に起源し、蛇信仰が最初から内包されている。吉野裕子氏の『蛇——日本の蛇信仰』によると、鏡はもともと「カガミ」と読まれ、「カカノメ」から変化したものだという。その変化過程については、次のように説明されている。蛇は古代日本語で「カカ」と読まれていたので、蛇の目は当然「カカノメ」と読まれていた。その後、「の」が省略され、第二の「カ」が濁って「ガ」に変わったので、「カガメ」という語ができあがった。さらに、「メ」は発音しやすい方向へと変わり「ミ」となったので、最終的には「カガミ」という語が形成された。

こうしてみると、卑弥呼は蛇とも深くかかわっているわけだが、事実彼女は『日本書紀』に記録された倭迹迹日百襲姫命であると多くの学者は考えている。『日本書紀』巻五の崇神紀には、次のような伝説が書かれている。

是後、倭迹々日百襲姫命、爲大物主神之妻。然其神常晝不見而夜來矣、倭迹々姫命語夫曰「君常晝不見者、分明不得視其尊顔。願暫留之、明旦仰欲觀美麗之威儀。」大神對曰「言理灼然。吾明旦入汝櫛笥而居。願無驚吾形。」爰倭迹々姫命、心裏密異之。待明以見櫛笥、遂有美麗小蛇、其長大如衣紐、則驚之叫啼。時大神有恥、忽化人形、謂其妻曰「汝不忍、令羞吾。吾還令羞汝。」仍踐大虛、登于御諸山。爰倭迹々姫命、仰見而悔之急居、此云菟岐于、則箸撞陰而薨。乃葬於大市。故時人號其墓謂箸墓也、是墓者、日也人作、夜也神作、故運大坂山石而造、則自山至于墓、人民相踵、以手遞傳而運焉。(坂本太郎、1994 : 507)

蛇神である「大物主神」との恋から見れば、倭迹迹日百襲姫命、つまり卑弥呼は蛇の世話をする巫女でもある。蛇は一般的に水の象徴であり「水神」、「豊作の神」とよく言われている。蛇は害虫を食べることはもちろんのこと、水のあるところに住むことが好きで、稲の成長環境と一緒なのである。中国でも日本でも、蛇神は水の管理者で、洪水を引き起こすことができ、鎮めることもできると伝えられている。稲作漁撈民にとって稲は必要な主食として重要な地位を占めており、稲にとって水が非常に大切である。しかし稲の収穫は天気、つまり太陽や水と密接に関わっているので、神様を頼むしかない。鬼道に事えられる卑弥呼の威信はそこから出てきたと考えられる。卑弥呼は巫女で、彼女の太陽と蛇への崇拜も結局稲作の必要に由来したのであろう。

中国でも、巫女あるいは霊力を持っている人はよく蛇とともに存在する。中国の『山海経』には蛇を耳に飾る、蛇を操る、蛇を踏む人がよく登場する。四海の神は全部蛇を踏む記載もある。『海外北経』では禺疆が「珥两青蛇，踐两青蛇。」と、『大荒東経』では禺虢が「珥两黄蛇，踐两黄蛇。」と、『大荒南経』では不廷胡余が「珥两青蛇，踐两青蛇。」と、『大荒西経』では弇兹が「珥两青蛇，踐两赤蛇。」とそれぞれ描かれている。

卑弥呼を埋葬する墓は奈良県桜井市にある箸墓古墳である。箸墓古墳は前方後円墓であり、古墳時代の幕開けだと言われている。纏向遺跡群のホケノ山古墳から、画紋帯同向式神獸鏡が一面と破片化した内行花文鏡が出土した。古墳時代の鏡は主に副葬品として出土したことから見ると、姿・形を映すものというより、お金持ちや権力者の宝物や祭事の器といった方が妥当なのである。

内行花紋鏡は太陽信仰の表現であり、三角縁神獸鏡は蛇信仰の表現である。もともと別々の信仰であったが、卑弥呼によって太陽信仰と蛇信仰が一体として統一されたように思われる。

三、霊力のある鏡

鏡は反射できることによって、祖先や仙人などを映せる霊力もあるとみられている。『古事記』の序文では「重加智の海は浩汗として、潭く上古を探り、心の鏡は焔煌として、明らかに先の代を觀たまふ。」(武田祐吉訳注、1979: 19)と書かれ、「心の鏡」は「先の代」を映せるという点から見れば、鏡にはもともと霊力があるに違いない。

鏡は「辟邪」の能力がついている。三角縁神獸鏡の銘文に「辟邪」の文字が見られ、「辟邪」道具として取り扱うに決まっていると考える。『風土記』久慈の郡に「自郡西北六里、河内里。本名古々之郡。東山石鏡。昔在魍魎。萃集翫来見鏡、則自去。」⁹とあり、ここで言う「石鏡」は鏡のような石という意味である。鬼は石の鏡の面を映すと、ただちに去って行ったというので、「石鏡」の魔よけの力が強調されている。

鏡は海の波を鎮める呪力も具えている。『古事記』応神天皇の章には、次のような記載がある。

かれその天の日矛の持ち渡り来つる物は、玉つ宝といひて、珠二貫、また浪振る比礼、浪切る比礼、風振る比礼、風切る比礼。また奥つ鏡、辺つ鏡、并はせて八種なり。(武田祐吉訳注、1979：142)

『古事記』の注釈では、奥つ鏡と辺つ鏡は海上の平安を守る鏡であり、「おきつ」は「海上遠く」を意味し、「へつ」は「海辺」を意味すると説明されている。「奥つ鏡」(おきつかがみ)の「おき」は「沖」の意、「つ」は「の」の意。「辺つ鏡」(へつかがみ)の「へ」は「海辺」の意、「つ」も「の」の意。「浪振る比礼、浪切る比礼、風振る比礼」と結びつけて考えると、「奥つ鏡」と「辺つ鏡」の中の「鏡」は海の波を鎮める呪力を具えている。

鏡は海の波を鎮めることができるばかりでなく、山河の水を鎮めることもできる。『日本書紀』巻第五「御間城入彦五十瓊殖天皇 崇神天皇」と巻第七「大足彦忍代別天皇 景行天皇」にはそれぞれ一例がある。まず巻第五の話を見てみよう。

時、丹波氷上人名氷香戸邊、啓于皇太子活目尊曰「己子有小兒、而自然言之『玉萎鎮石。出雲人祭、眞種之甘美鏡。押羽振、甘美御神、底寶御寶主。山河之水泳御魂。靜挂甘美御神、底寶御寶主也。萎、此云毛。』」(坂本太郎等校注、1994：510)

以上の引用について、『日本書紀』は次のように注釈している。

玉のような水草の中に沈んでいる石。出雲の人の祈り祭る、本物の見事な鏡。力強く活力を振う立派な御神の鏡、水底の宝、宝の主。山河の水の洗う御魂。沈んで掛かっている立派な御神の鏡、水底の宝、宝の主。(中略)ソコタカラは、その鏡が水底にあることを示す語。(坂本太郎等校注、1994：303)

甘美鏡はなぜ水底に沈んで掛かっているのかということ、山河の水を鎮められるからだと思われる。山河の水は無常で氾濫しやすい。山河の水神は蛇神なので、鏡を水底に掛けると、山河の水神が鎮圧されるだろうと人々は期待していた。『日本書紀』巻第七にはまた荒波を鎮める話がある。

亦進相摸、欲往上總、望海高言曰「是小海耳、可立跳渡。」乃至于海中、暴風忽起、王船漂蕩而不可渡。時、有從王之妾曰弟橘媛、穗積氏忍山宿禰之女也、啓王曰「今風起浪溢、王船欲沒、是必海神心也。願賤妾之身、贖王之命而入海。」言訖乃披瀾入之。暴風即止、船得著岸。故時人號其海、曰馳水也。爰日本武尊、則從上總轉、入陸奥國。時、大鏡懸於王船、從海路廻於葦浦、橫渡玉浦、至蝦夷境。(望月二郎、1897: 146)

日本武尊は奥国に行った時に暴風に遭った。海の荒波を鎮めるために鏡を船に掛けたという話である。この海神は海蛇であろう。

『古事記』にはまた八俣大蛇の話がある。「彼が目は赤加賀智の如くして、身一つに八頭八尾有り。亦、其の身に蘿と檜・杉と生え、其の長さは溪八谷峽八尾に度りて、其の腹を見れば、悉に常に血爛れたり。」(武田祐吉訳注、1979: 39) というイメージの八俣大蛇は毎年山から降りてきて、若い娘を食うという物語が書かれている。被害者の「くしなだひめ」はすなわち「稲田姫」であり、稲の成長に欠かすことのできない水と結びつけて考えると、八俣大蛇の侵害は大洪水である。海蛇は大洪水を氾濫させることはないが、荒波で人の命を奪い取ることもでき、漁の多少を左右することもできる。そして蛇は金属を怖がるので、鏡を海に入れ、海蛇を鎮めることができるという考え方が生まれたわけである。

鏡を水の中に投げ込む話は、日本の昔話の中にも数多く語られている。山形県鶴岡市には月山、羽黒山、湯殿山という出羽三山があり、羽黒山の山頂の出羽神社には三山を統合して祀った神社、三神合祭殿が鎮座している。その手前には鏡池があり、青銅鏡が 500 枚以上その中に投げ込まれているようである。

羽黒山神社の鏡池の底は蜂子皇子が上陸した八乙女浦の岩窟とつながっているとされている。山中の池が大海とつながっているとすれば、池に投げ込んだ鏡は結局四海の安寧を祈ることにもなる。

一方、日本では山神は蛇の化身だとイメージされている。『日本書紀』巻第七に「日本武尊、更還於尾張、即娶尾張氏之女宮竇媛、而淹留踰月。於是、

聞近江五十葺山有荒神、卽解劔置於宮簀媛家、而徒行之。至膽吹山、山神、化大蛇當道。」(望月二郎、1897:148)とあり、山神を大蛇とみなしている。『常陸国風土記・行方郡』にも次のような伝承が記載されている。

古老曰、石村玉穂宮大八洲所馭天皇之世、有人、箭括氏麻多智。献自郡西谷之葦原墾闢新治田。此時、夜刀神、相群引率、悉尽到来、左右防障、令勿耕佃。(俗云、謂蛇為夜刀神。其形蛇身頭角。率免難時、有見人者、破滅家門子孫不繼。凡此郡側郊原、甚多所住之)於是、麻多智大起怒情、著被甲鎧之、自身執仗、打殺駙逐。乃至山口、標稅置塚掘、告夜刀神云、「自此以上、聽為神地。自此以下、須作人田。自今以後、吾為神祝、永代敬祭。冀勿崇勿恨」、設社初祭者。即還、發耕田一十町余、麻多智子孫、相承致祭、至今不絶。(植垣節也、1997:376-378)

縄文晩期に、稲作文化は日本列島に伝播してきた。その後、人間は原始林から稲田を開墾するために、蛇を殺したり、山へと追いかけていたりしていた。『常陸国風土記・行方郡』で述べたように、麻多智は蛇を「打殺駙逐」してから、山口で注連縄を張り、堀を掘って蛇を山の神として祀った。一方、蛇はよく水源地に生息するので、水をつかさどる神様とも崇められた。したがって、蛇は水神だけでなく、山神とも見なされるわけである。

開湯神話では、大蛇はまた赤城山の神として登場している。『山岳信仰と考古学Ⅱ』によると、赤城山頂部から出土した鏡は大洞赤城神社に保管され、伝世品・奉納品を含め、古墳時代から近世に到るまでの鏡は1000面超えるという。なんのために鏡を山頂に埋納したのかというと、やはり山神である蛇を鎮圧するためだと筆者は考える。

鏡は山神を鎮圧する呪力があり、そして人々は祭祀を通して被害を避けることができるので、日本の各地では鏡山、鏡岩など鏡にまつわる山名が多い。太宰帥の河内王を鏡の山に葬ったときの歌が万葉集に収録されている。鏡の山の近くには、ほふき原の地名もあり、古代の墓地であったことがわかる。その歌は次のとおりである。

王おほきみの睦魂あへや、豊国の鏡の山を、宮と定むる 手持女王

豊国の鏡の山の岩門立て、隠もりにけらし。待てど来まさず 手持女王¹⁰

手持女王は鏡の山に葬られた河内王の帰りを空しく待つ心情が詠われている。豊国の鏡の山は福岡県田川郡香春町鏡の山を指し、その鏡山神社には、

仲哀天皇は神功皇后と共に熊襲を御征伐に来た話が伝わっている。皇后は熊襲が叛いて服従しないのは新羅の後援があったからだとして、みずから男装して舟師をひきいて新羅に向かった途中で岡に登って鏡を祀った。それが鏡山神社の草創と伝えられている。

佐賀県唐津市にある標高 283.56 メートルの山が鏡山とも称される。鏡山の名前は、神功皇后が山頂に鏡を祀ったことによって由来するといわれている。『日本書紀』神功皇后紀にも皇后は劍鏡を借りて溝を通すという話がある。

皇后、召武内宿禰、捧劍鏡令禱祈神祇而求通溝、則當時、雷電霹靂、蹴裂其磐、令通水、故時人號其溝曰裂田溝也。(望月二郎、1897: 162)

神功皇后は劍と鏡を神聖な器具として使い、神の世界に通じたわけだが、今日でも、「三種の神器」としての「八咫鏡」、「八坂瓊の曲玉」、「草薙劍」は天皇家の象徴である。そして、卑弥呼と同じように鏡を重要視する神功皇后が多く、多くの学者は卑弥呼だと指摘していた。

鏡は神ともかかわっている。筆者は尾道市の千光寺に行った時、そこに鏡岩が存在していることに気がついた。「鏡岩」と言っても、別に岩には鏡があるわけではない。昔、岩は鏡のように反射できて、しかも鏡には神が宿っているということなので名付けたと言われている。日本の貴船山の中腹にも鏡岩がある。いくつかの大きな岩が積み重なり、中央が室となっている。神社ができる前に古代の祭場であったと推測する。太古の昔、貴船大神が丑の年の丑の月の丑の日の丑の刻に、この鏡岩に天上から天降ってきたとの伝説が残っているので、神聖な岩となっている。

要するに、鏡は太陽信仰と蛇信仰一体性の表れだけでなく、霊力または呪力も付いているのである。

四、日本の鏡と中国苗族の鏡

日本の鏡に寄託された太陽信仰と蛇信仰は中国の稲作漁撈民である苗族に起源したと考えられる。

中国の苗族の鏡にも日本の鏡と同じように、太陽信仰と蛇信仰が同時に含まれている。中国貴州省でフィールドワークした時に、苗族の家々の玄関に注連縄と鏡と一緒に飾られていることを発見した。現地の人々に聞いたら、それは鬼と悪霊を追い出すためのものだとか、先祖代々伝わってきたもので

具体的な意味がわからないとか、色々な説明があった。苗族は普段苗語を話しているので、「鏡」に関する言い方および文化的な意味を調査した。苗語東部方言区（湖南省西部の苗語）では、鏡を「jaob ginb」という。「jaob」は「掛ける」の意、「ginb」は「虫」の意、したがって「jaob ginb」は「掛ける虫」の意となる。玄関の上に注連縄を掛けるという苗族の習俗と結びつけて考えると、ここの「掛ける虫」は玄関の上に掛けられている蛇ということになる。苗語中部方言区（貴州省東部の苗語）では、鏡を「mais hnaib」という。「mais」は「目」を指し、「hnaib」は「太陽」を意味する。修飾語が中心語に後置されるという苗語の語順をふまえて訳すと、「太陽の目」ということになる。要するに、苗族の鏡にも太陽信仰と蛇信仰が同時に含まれており、日本の鏡とは本質的に共通しているのである。

日本の鏡と苗族の鏡が共通している原因にいたっては、共通した稲作文化の基盤があげられる。稲作農耕が日本に伝わったのは縄文晩期であるが、その起源は中国の長江中下流域である。

李国棟氏は『従苗語稲音“na”看稻作的起源與傳播』や『蚩尤身份考証』などの論文で繰り返し指摘しているが、長江中流域の豊陽平野では、8500－6000年前、古苗人は一番早く野生イネを栽培イネにドメスティケートし、そして苗語で稲のことを「な」と命名した。そして、「な」と命名された稲作が日本列島に伝播し、3000年前の「菜畑遺跡」や2000年前の「奴国」がその証拠となっている。「菜畑遺跡」の「菜」(な)も「奴国」の「奴」(な)もみな苗語の「な」に由来し、「稲」を意味していると李国棟氏は強調しているが、考古学の分野では、安田喜憲氏も同様な意見を主張している。このような時代背景から考えると、日本の鏡はそもそも中国苗族が持つ太陽信仰と蛇信仰の一体性を継承しているのだと断定することができる。

考古学的にみると、日本では弥生中期から太陽信仰が内行花紋鏡とつながるようになったのだが、弥生後期に入ると、三角縁神獸鏡が大量に鑄造され、蛇信仰もついに銅鏡と結びつくようになった。三角縁神獸鏡が大量に鑄造されたという現象の背後には、太陽信仰と蛇信仰の一体性がつよく働いているのではないかと考えられる。

注

- ¹ 飯田瑞穂校注、神道大系編纂会『日本神道大系古典編 5 古語拾遺』東京：精興社、1986年、第103頁。
- ² 許慎『説文解字』北京：中華書局、2001年、第8頁。
- ³ 新村出編『広辞苑第六版』東京：株式会社岩波書店、2008年、第212頁。
- ⁴ 土橋寛 小西甚一校注『日本古典文学大系 3 古代歌謡集』東京：岩波書店、1957年、第90頁。
- ⁵ 渡邊静夫編『日本大百科全書 4』東京：小学館、1994年、第856頁。
- ⁶ 大槻文彦『新編大言海』東京：富山房、1983年、第388頁。
- ⁷ 戸部民夫『神秘の道具』東京：新紀元社、2004年、第55頁。
- ⁸ 鳥越憲三郎『中国正史倭人・倭国伝全釈』東京：中央公論新社、2005年、第121頁。
- ⁹ 植垣節也『風土記』東京：小学館、1997年、第408頁。
- ¹⁰ 鏡の山、<http://nire.main.jp/rouman/fudoki/51huku14.htm>。最終アクセス日 2018年11月21日。

参考文献

日本語

- 武田祐吉訳注 中村啓信補訂・解説『新訂古事記』東京：角川文庫、1979年。
望月二郎『国史大系第一巻』東京：経済雑誌社、1897年。
坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋『日本書紀』東京：岩波書店、1994年。
荻原秀三郎『稲と鳥と太陽の道』東京：大修館書店、1996年。
植垣節也『風土記』東京：小学館、1997年。
吉野裕子『蛇-日本の蛇信仰』東京：講談社学術文庫、1999年。
山の考古学研究会編『山岳信仰と考古学 II』東京：同成社、2003年。
安田喜憲『山岳信仰と日本人』東京：NTT出版株式会社、2006年。
新谷尚紀『伊勢神宮と三種の神器-古代日本の祭祀と天皇』東京：株式会社講談社、2013年。
安田喜憲『日本神話と長江文明』東京：雄山閣、2015年。
李国棟『稲作文化にみる中国貴州と日本』東京：雄山閣、2015年。
藤田憲司『邪馬台国とヤマト王権-卑弥呼の鏡が解き明かす』東京：えにし書房、2016年。

中国語

- 曹翠雲 潘定華編『苗漢辞典』貴陽：貴州民族出版社、1990年。
伍新福 龍伯亜『苗族史』成都：四川民族出版社、1992年。

王文光 李曉斌『百越民族發展演變史-從越、僚到莊侗語族各民族』北京：民族出版社、2007年。

游修齡 曾雄生『中国稲作文化史』上海：上海人民出版社、2010年。

李国棟 趙敏『從苗語稻音“na”看稻作的起源與傳播』、『中国農史』2015（4）。

李国棟 程海蓼『山東「聖虫」與日本「鏡餅』』、『貴州大学学报（哲学社会科学版）』2016（6）。

劉向 劉歆『山海經（彩色詳解版）』北京：團結出版社、2017年。

李国棟 程海蓼『論太陽信仰與蛇信仰的一体性——基於對日本鏡與中国苗族鏡的考察』、『日語學習與研究』2018（2）。

付録——『古事記』における「鏡」の実例

1	祭祀用鏡	寔に知る、鏡を懸け珠を吐きたまひて、百の王相続き、劍を喫み蛇を切りたまひて万の神蕃息せしことを。P17
2	呪力鏡	重加智の海は浩汗として、潭く上古を探り、心の鏡は焔焔として、明らかに先の代を觀たまふ。P19
3	信仰対象 (八咫鏡)	ここを以ちて八百万の神、天の安の河原に神集ひ集ひて、高御産巢日神の子思金の神に思はしめて、常世の長鳴鳥を集へて鳴かしめて、天の安の河の河上の天の堅石を取り、天の金山の鉄を取りて、鍛人天津麻羅を求ぎて、伊斯許理度売の命に科せて、鏡を作らしめ、玉の祖の命に科せて八尺の勾璽の五百津の御統の珠を作らしめて。P36
4	信仰対象 (八咫鏡)	天の兒屋の命布刀玉の命を召びて、天の香山の真男鹿の肩を内抜きに抜きにて、天の香山の天の波々迦を取りて、占合まかなはしめて、天の香山の五百津の真賢木を根掘じにこじて、上枝に八尺の勾璽の五百津の御統の玉を取り箸け、中つ枝に八尺の鏡を取り繫け、下枝に白和幣青和幣を取り垂でて。P37
5	信仰対象 (八咫鏡)	かく言す間に、天の兒屋の命、布刀玉の命、その鏡を指し出して、天照らす大御神に示せまつる時に、天照らす大御神いよよ奇しと思ほして、やや戸より出でて臨みます時に、その隠り立てりし天手力男の神、その御手を取りて引き出だしまつりき。すなはち布刀玉の命、尻久米繩をその御後方に控き度して白さく「これより内にな還り入りたまひそ。」とまをしき。P37
6～7	信仰対象 (八咫鏡)	ここにその招きし八尺の勾璽、鏡、また草薙の劍、また常世の思金の神、手力男の神、天の石門別の神を副へ賜ひて詔りたまはくは「これの鏡は、もはら我が御魂として、吾が前を拝くがごと、斎きまつれ。次に思金の神は、前の事を取り持ちて、政まをしたまへ」とのりたまひき。P64
8	普通な鏡	伊斯許理度売の命は、鏡作の連等が祖。P64

9	普通な鏡	また山代の玖玖麻毛理比売に娶ひて生みませる御子、 <u>足鏡別の王</u> 。P121
10	普通な鏡	<u>足鏡別の王</u> は鎌倉の別、小津の石代の別、漁田の別が祖なり。P122
11	祭祀用鏡	また横刀と大鏡とを貢上りき。P137
12～13	呪力鏡	かれその天の日矛の持ち渡り来つる物は、玉つ宝といひて、珠二貫、また浪振る比礼、浪切る比礼、風振る比礼、風切る比礼。また <u>奥つ鏡</u> 、 <u>辺つ鏡</u> 、并はせて八種なり。P142
14～15	祭祀用鏡	隠国の 泊瀬の川の 上つ瀬に 斎杵を打ち、下つ瀬に ま杵を打ち 斎杵には <u>鏡</u> を掛け ま杵には ま玉を掛け ま玉如す 吾が思ふ妹 <u>鏡</u> なす 吾が思ふ妻 ありと いはばこそに 家にも行かめ 国をも偲はめ。P169